

東日本大震災における保育士の対応に関する文献検討

Review of Papers on Support of Nursery School Teachers after Great East Japan Earthquake

(2012年3月31日受理)

原 田 眞 澄

Masumi Harada

Key words : 東日本大震災, 保育士, 保育所, 防災訓練, 避難

要 約

2011年3月11日東日本大震災が発生し、かつてない大規模な被害があり世界を震撼させた。この震災においては多数の死者がでたものの、実際には「釜石の奇跡」に象徴されるように適切な防災訓練と適切な避難によって救われた命も少なくなかった。そこで、本研究では地震発生時に保育所において保育士はどのような対応をしたのか、その防災対策とはどのようなものだったかを明らかにするため、保育雑誌に掲載された事例から情報を収集し、各保育所に共通する防災対策と避難の原則を考察した。その結果、1) 危機を察知したら一刻も早く避難する、2) 地震と津波の構えを生かして避難する、3) 保育士と園児との信頼関係がある、4) 自分より園児、家族より園児をつらぬく、の4つの原則が明らかになった。

はじめに

平成23年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0の東日本大震災が発生し、かつてない大規模な被害となったことは世界を震撼させた。私も微力ながら自分にできることのひとつとして、同年7月中国学園大学・中国短期大学の災害ボランティアの一員として宮城県気仙沼市で活動させていただいた。建物も木もなく壊滅状態の街、遺体捜索中の機動隊とがれき撤去の作業員しか見えない惨憺たる状態を目の当たりにした私は、言葉を失った。そして、一瞬にしてすべてを奪い去った自然の威力に、言い知れぬ恐怖を覚えた。

この震災については、時間の経過とともに様々な情報が明らかにされてきたが、その中で「釜石の奇跡」はとくに印象的であった。これは、甚大なる被害者が出た中で、岩手県釜石市内の小・中学校は登校していた児童生徒が全員無事に避難できたというものである。それは単

なる偶然ではなく、以前から防災教育を計画的に実施してきた成果だと知り大きな示唆を得た思いがする。

ふと自分の生活を振り返ってみると、1993年に隣の兵庫県で関西大震災が発生したにも関わらず、釜石ほどの意識をもたず無防備な生活をしていることを深く反省させられた。そこで、保育生対象の授業で「危機管理」について講義する機会を得ていた私は、震災発生時の保育士の対応事例を取り上げて防災対策のあり方に一石を投じることにした。当時、保育士の対応に関する報告のうち活字になったものの事例は限られていたが、保育士の活躍なくしては救われなかったであろう幼い命があったことに深く感銘し、あらためてその存在価値を再認識するに至った。

そこで、本研究では、東日本大震災における保育士の対応の報告から、地震や津波に焦点を当てて防災対策のあり方について検討したいと考えた。

1. 研究目的

東日本大震災における保育士の対応事例をもとに、保育所における地震と津波の防災対策のあり方を明らかにする。

2. 研究方法

- 1) 研究期間：平成23年9月から平成24年3月
- 2) 研究方法：中国学園図書館所蔵の保育系雑誌に掲載された東日本大震災に関する保育士の対応事例を収集し、各保育所に共通する防災対策と避難の原則を考察する。

3. 研究結果

保育系雑誌「保育の友」「保育情報」に掲載されていた事例は以下の8事例であった。内訳は、岩手県3事例、宮城県4事例、茨城県1事例であった。



図1. 保育所の場所

事例1：岩手県陸前高田市立高田保育所

(月刊「保育情報」No. 414. MAY. 2011より抜粋)

熊谷園長は「地震当日は、大きな揺れに津波が来る！」と思い避難の準備をしました。職員が海の方を見ると大きな波と土煙が上がっているのが見え、『これはいつもと違う!』と、大急ぎで避難を始めました。子どもたちは裸足のままでしたが、早く! 早く! と必死で走らせました。職員も胸が苦しくなるくらい走ったのですが、子どもたちは泣きもせずほんとはよく走りました。その

日は、園の行事があつて早く降園した子ども、地震後すぐに迎えに来た子どもを除いて、34人で避難しました。

事例2：岩手県陸前高田市立今泉・長部保育所

(月刊「保育情報」No.414 MAY. 2011より抜粋)

地震が起きた時は昼寝直後で、すぐに迎えに来た保護者には子どもたちを渡し、残った17人と職員で山の方に避難しました。山道も寸断、山をよじ登るしかありませんでした。近くの小学校までの訓練はしていたけれど山への避難は初めてでした。眼下は津波が押し寄せて、家が、人がのみ込まれていきました。山道を歩いているうちに薄暗くなり、たどり着いたお寺で子どもたちと一泊させてもらいました。衣服、毛布、暖房ととても親切にしてもらいました。2日目はまだ保育者と対面できない7人の子どもを連れて、山越えし、長部保育園で過ごしました。パジャマ姿で寒かったし大変だったのに子どもたちは、弱音も吐かず本当に頑張りました。

事例3：岩手県大船渡市・明和保育園

(保育の友Vol.59 No.11 9月号より抜粋)

午睡が終わり、各保育室でおやつ準備を始めていたそのとき、震度6弱の大きな揺れに襲われました。これまで経験したことのない強い揺れ。保育士たちは驚きながらも、避難訓練のとおり、一時避難場所である保育室の入り口に子どもたちを集めて揺れが収まるのを待ち、三歳児クラスの部屋へ全員が移動しました。保育士の冷静な行動に、子どもたちも泣いたりパニックになることなく、落ち着いて行動できたといいます。

揺れが収まったあと、すぐに保育士たちが行ったことは水汲みでした。「ライフラインが遮断されることは予測できました。水は出たので、出るうちにできるだけ確保しようと考えました」と金野うき子園長。その後、眼下に見える町を津波が襲います。

交通網がマヒしたため、保護者が迎えに来られなかった園児、迎えに来て帰るすべを失った親子、近隣の小中学生や地域住民、職員の合計100人が保育園に身を寄せ、一夜を明かしました。食料は、備蓄していたクラッカーや当日のおやつに用意していたパンプディングを100人で分けたといいます。

事例4：宮城県石巻市・なかよし保育園

(保育の友Vol.59 No.10 8月号より抜粋)

巨大津波により甚大な被害を受けた石巻市。とくに被害が大きかったのは沿岸・河口部。石巻港から距離にして約5kmという場所にある「なかよし保育園」も床上50cm浸水という被害を受けました。

地震直後から次々と保護者の迎えがあり、17時半には1歳児が2名、3～5歳児が各1名の5人の園児を残すのみに。それでも14人の保育士たちは誰ひとりとして帰ろうとせず子どもを守りました。19時すぎ、園庭に真っ黒な水が流れ込んできたため、全員で2階の子育て支援センターへ移動。「ここまで津波がくるとは思わなかった」と言いますが、想定外の状況にも保育士たちは冷静さと明るさを忘れませんでした。全園児を保護者へ帰すことができたのは3日後の午後のことです。

事例5：茨城県潮来市・日の出保育園

(保育の友Vol.59 No.13 11月号より抜粋)

揺れが起きたのは午睡明け。保育士たちは手元にあるふとんを子どもたちにかぶせて身を守り、同時に保育室のドアを開けました。揺れは、さらに大きく、強くなります。しかし、保育士たちは誰ひとり取り乱すことなく、立ったまま開けたドアを抑え『もう終わるからね』と子どもたちに声をかけました。「仮説園舎だったので、各保育室とも出入り口が何か所しかありませんでした。出口を確保するためにどのクラスも保育士がドアを抑えていました。」と中田孝子主任保育士。指示されて動くのではなく、そこで何をすべきか、何が必要か、何ができるのかを考え判断し、行動したのだと埴信一園長はうなずきます。

揺れがおさまると同時に園庭に出て、そこで待機しました。次々とお迎えが来ました。中田主任は、どの子どものお迎えに、だれが何時に来たのかをすべて記録したといいます。「緊急時は誰もが混乱します。だからこそ、細やかな対応が必要になるのです。日頃の避難訓練がとも役立ったと思います。」と埴園長。

電車が止まり、橋は陥没し、道路は渋滞と通行止めで、「帰宅難民」となった保護者もいます。午後6時、残っている30名程の園児を連れて新しい園舎に入りました。ここが構造上一番強く、安全だといわれていたからです。

余震があるなか、保育士は仮設園舎に戻って子どもの布団などを運び出し、それらで暖をとりながらお迎えを待ちました。最後のお迎えが来たのは午後9時過ぎです。

事例6：宮城県仙台市・福室希望園

(保育の友Vol.59 No.87月号より抜粋)

突然の大きな揺れに、今まで経験したことのない恐怖を感じました。「避難、避難をさせて!!」。揺れはひどくなっていきます。事務室のロッカーの上にあったものは揺り落とされて何もなくなり、すぐに停電しました。

「園庭にビニールシートを敷いて、子どもたちを外に避難させて!」すぐに水道も断水になると思い、赤くなってきた水を見て「蛇口はそのまま止まるまで出し続けて」「テントを出して」「園庭に焚火をたいて」など、時間にしたら5分程度でしたが、指示を出し続けました。

当日は、130名の子どもが登園していましたが、ゼロ歳児は保育士がおぶったり抱っこしたりして、1歳児クラス以上の子どもたちは保育士の誘導により、園庭に避難しました。

外は雪が降っていて、ビニールシートの上にもふとんでは寒すぎます。余震は続いていましたが、建物には異常がなかったことから、「本震より強い地震はない」と信じて、2時間ほどで室内に子どもを入れました。

その間、子どもたちは迎えに来た保護者と順次帰宅していきます。午後5時を過ぎるとすっかり暗くなりました。広い部屋に集合させて、できるだけ多くロウソクをつけました。ライフラインはすべてストップしています。ガストーブなので暖が取れません。職員が中心になって寄り添い、ゼロ歳児はおんぶをしました。今日中に子どもたちを帰せるのか、不安に思いましたが、何とか夜の12時までには全員迎えに来てくれました。職員は全員、保育園に宿泊となりました。

事例7：宮城県亶理町・荒浜保育所

(保育の友Vol.59 No.14 12月号より抜粋)

大きな地震があれば津波がくる地域ということで、津波の想定も含め月一回必ず避難訓練を行っていました。また以前から、避難時にすぐに履けるよう、午睡の際に上靴を枕元に置いて寝ていました。地震が起きたときも午睡中でした。ホール隣の保育室では、3、4歳児が午

睡をしていましたが、すぐに部屋の中央に子どもたちを集め、ふとんで囲むと同時にその上からブルーシートをかぶせて落下物に備え、中にいる子どもたちに上靴・防寒着を投げ渡し、すぐに避難を開始しました。

5歳児は、事務所隣の保育室で半数が目覚めたところに大きな揺れがきました。全員に声をかけテーブルの下に潜りましたが、テーブルが大きく前後左右に揺れるなか、保育士は子どもを守りながら机の脚を抑えるのに必死だったといいます。

未満児のクラスでは、驚いて泣き出す子どもたちを布団で守りながら、子どもをおんぶ、抱っこし、声をかけ合い、避難車・ベビーカー4台に分乗し、施設裏側から避難を開始しました。

3歳以上も何度も点呼をしながら保育所正門に集合、500m先の荒浜中学校をめざし、走りました。

当日58名の子どもたちと15名の職員が荒浜中学校に着いたのは、地震発生から25分後だったと思います。玄関から3階の美術教室までみんなで必死で上りついて10分後、津波の第一波が二方向から襲ってきました。津波は中学校の二階天井まで到達しました。

事例8：宮城県気仙沼市・一景島保育所

(保育の友Vol.59 No.14 12月号より抜粋)

揺れがおさまるのを待って外へ飛び出し、0～2歳児を避難車に乗せ、3歳以上は歩いて、約100m離れた気仙沼中央公民館へ避難しました。保育所と同じ敷地内にある知的障害児施設のスタッフや以前から避難時に協力をお願いしていた工場の若い職員もすぐにつけてくれ、一緒に避難しました。

避難所には、すぐに近所の方や保護者が集まってきました。保護者が子どもを車に乗せて帰ろうとするのを、保育士たちは必死に止めました。避難マニュアルに、津波警報が出ているときに保護者が迎えに来ては帰さないことが、以前から明記されていたからです。結果として、この判断が、多くの子どもと保護者の命を救うことになりました。

4. 考 察

釜石の奇跡とは、岩手県釜石市内の小中学生で登校していた2,920人が、学校から全員無事に避難できたというものである。1933年の昭和三陸地震や1960年のチリ地震津波に苦しんできた同市は、2004年から8年間子どもたちに津波の怖さを教え込んでいたという。同市防災・危機管理アドバイザーを務める群馬大学大学院片田敏孝教授が子どもたちに繰り返し伝えたのは、①揺れたら家に向かわず、とにかく逃げろ、②ハザードマップを信じず、状況を見て判断すること、③人を助けることの3点だけだという。過去に地震や津波に被災していること、今後も被災する可能性があるという危機感があることが基盤にあるが、なにより低学年でも「自分の身は自分で守る」「とにかく高いところへ」という意識をもてる適切な防災教育が成功の大きな要因とされている。

つまり、小学生以上の発達段階では被災する可能性への危機感をもち、防災教育の骨子を理解して行動できるのである。また、小・中学生という9学年の集団になると、仮に教師の人数が十分でなくてもより年上の者がリーダーシップをとって状況判断できること、誘導の声を上げて安全な場所に導くこと、弱者を守ることなど様々な可能性が実証されたことになる。

しかし、これをそのまま保育所で預かる0から5歳児の集団にあてはめることはできない。各保育所でも年間を通じて計画的に行われている防災訓練は、災害時に子どもからも保育士からひとりの犠牲者も出さないためのものである。子ども自身が自分の身を守る力を習得することも目標としているが、低年齢になればなるほど心身の発達が未熟で、自分で移動することすらできない子どもが増えてくる。勿論、幼児であっても的確に状況を判断する力は備わっていない。こうしたことから、災害時に保育士が担わなければならない重責はいかばかりのものか推察する。

今回収集した8事例を概観し、各保育所に共通する防災対策と避難の原則を考察したことを次にまとめる。

1) 危機を察知したら一刻も早く避難する

事例1は、園長が大きな地震の直後に津波が来ることを予測して直ちに避難の準備をし、一方職員も危機を察

知してすぐ大急ぎで高い場所への避難を始めている。また、事例6は、園長が大きな揺れに今まで経験したことのない恐怖を感じて、すぐに大声で園庭への避難を指示している。地震や津波の可能性が高い地域であるからこそ、園長だけでなく保育士すべてが異常のサインにアンテナを張っていたことがうかがえる。

保育士を取り巻く環境の差で多少見聞きする情報は異なる可能性を考慮すると、危険を察知した者が一刻も早く声を上げ周知徹底をはかり避難につなげることが重要であると考えた。

事例7は、15人しかいない職員で58人の子どもを避難させているが、低年齢児は避難車・ベビーカーだけでは収容できなくて、おんぶ抱っこをしながら25分で避難所にたどり着いている。そのわずか10分後には津波が襲っていることから、まさに一分一秒を争う避難であったといえる。短時間で高い所へ到着するためには、道路が無事なら大勢を収容できる避難車はかなり有効であることがわかるし、保育士がおんぶ紐を上手に使いえば抱っこと合わせて前後2人を連れて搬送できる可能性もある。

2) 地震と津波の構えを生かして避難する

事例2は、道が寸断していたものの、「とにかく高いところへ」の原則を守りあきらめずに山をよじ登って高い場所に避難している。事例5は、各保育室とも出入口が一か所しかないので、出口を確保するため保育士がドアを抑えていた。揺れがおさまった時の避難に備え出口を確保することは知識としてあったとしても、機転を利かせてその役割をとるのは決してたやすいことではないと思う。なぜなら、保育士としては目の前の子どもの安全確保を考えるからである。落下物から守らなければという意識が先行してしまい子どもの傍には行けても、出口への意識をもつ余裕は通常では難しい。

2事例だけでなくすべての事例に共通するのは、災害時に行動にうつせるだけの訓練と確実な知識の集積の成果といえる。宮城・岩手・福島の3県で、保育中の園児の死亡がゼロであったという。

地震と津波発生時に必要な役割を確実に分担し、完璧にこなすことはたやすいことではないけれども、たとえ私たちのように自然災害の少ない地域で生活している者であっても、訓練を繰り返しおこなえば各自がすべきこ

とできることを瞬時に判断し行動にうつすだけの意識を定着させることができるのだと考える。

また、事例8は、周辺の施設職員や工場員に避難時の協力要請をしていて、訓練同様に保育士の力になってくれたという。これは、今回の調査で初めて知ったマニュアルである。1)のように一刻を争う避難であればあるほど、保育所のスタッフだけでは全員を高い場所へ移動させることには限界を伴ってくる。そこで、保育所周辺になるマンパワーに着眼し、協力して避難するという考え方に及んでいるのであろうが、地域住民のネットワークを上手に活用していると感心させられた。

すべての保育所は、月1回のペースで避難訓練をしていたが、その訓練のベースとなるマニュアルには、避難場所や避難経路、そして保護者との連絡方法や引き渡しなど細部におよぶルールがあった。事例8の、津波警報が出ているときに保護者が迎えに来て帰さないことがマニュアルに明記しており、おそらく訓練で周知徹底していたのであろう保護者が子どもの車を乗せて帰ろうとするのを、保育士たちは必死に止めたという報告がある。保護者もまた被災者であり、精神的には動揺していることが考えられる。その状態で我が子を手元に戻してもらって、避難所から別の場所に移動しようとする心理もわからなくはない。しかし、冷静になって考えれば、他より安全だから避難所に指定されているのである。津波警報が鳴っている間は保護者に引き渡さないルールを厳守すれば、多くの子とも保護者の命を救うことは覚えておきたい。

3) 園児との信頼関係がある

事例1は、子どもたちを裸足のまま必死で走らせたが泣きもせず走り、事例2は、山越えしてたどりついた保育所で過ごした時、パジャマ姿で寒かったのに弱音を吐かずに耐えている。これを読んだとき、なぜあんなに小さい子たちが避難しきれたのか、雪が降る寒い日にどうして裸足で、パジャマ姿で走りとおせたのか、考えるだけでも胸が痛んだ。そして、一度も逢ったことのない子どもたちの輝いた目が想像された。親と離れて保育所に預けられていた時間ただだけに、保育士と逃げる園児にとっては頼みの綱は保育士だけだったに違いない。また、その保育士に対する信頼感なくして、泣かずにつ

いていくことはできなかったと思われる。園児はいつも保育士の姿を見ているので、保育士の形相で緊迫感は一瞬に伝わり、全面的信頼で必死についてきてくれたのであろう。

4) 自分より園児，家族より園児をつらぬく

関川⁹⁾は、災害発生時に保育士がとるべき行動について、次のように述べている。①子どもの命を第一に考える、②自らの安全を確保する、③同僚の無事を確認する、④建物の被害を確認する、⑤責任者に報告をする。先述のとおり、自分で自分の身を守ることができない乳幼児を預かる保育士は、保護者になり替わってその子どもの命を守り健全な心身の発育を目指すことを役割としている。報告された事例も、すべてのことに優先して子どもの命を守っている。そして、事例2, 3, 4, 5は夜を徹して、あるいは何日も泊り込んで子どもの保育に専念する保育士の姿がある。1年以上たった現在、あらためて専門職といわれる保育士の役割の重さに気づかされた。

1000年に一度といわれる災害は、どの人にとっても辛く悲しい出来事であったに違いない。私も報道されている膨大な情報量に触れてきた一人として、なんとなくわかった気であった部分があったように感じる。しかし、あの日保育士たちがどうやって幼い命を守ったのかの報道はごくわずかしかなかく、これ程詳細な気配りとの確な行動があったことを知らなかった。結局、被災地にボランティアに行かせていただいても、知り得ることや経験はごく限られたものでしかないということである。テレビや新聞による報道では被害の甚大さに焦点が当たり、多くの命を守ってくれた保育士の活躍に私自身があまり関心を抱いていなかったのが事実である。何事もそうであるように、物事は目を向けなければ見えるものもない。今回の研究で何度も読み返す時間を得られたことは、多くの実践報告に触れる大変貴重な時間だったと感謝している。

成功事例で保育士がとった行動は、どれも訓練したことをベースに、慌てることなくお互いの役割を分担してきばきしたものに思える。これは、専門職だからできたのであろうか。おそらく「自分はこの子どもたちの命を預かる保育士だ」という使命感は大きなウエイトを占めていたと考える。しかし、それだけではないようにも

思える。それは、先祖が1933年の昭和三陸地震や1960年のチリ地震津波で味わった苦渋、二度と繰り返してはならないという思いに根ざした防災に対する真剣な構えではないだろうか。

日本は、あるいは世界は今後も地震や津波が発生する可能性を秘めている。それに真剣に向き合うのかどうかは各保育所に委ねられた課題ともいえる。つまり、保育所などで想定される災害には火事や不審者侵入など様々な可能性があり、毎月地震と津波だけに限定した訓練は時間的にも制約されるのではないだろうか。

私は、保育士養成にかかわる者として、まず知識の普及の部分が担当できると考えたので、今後は「子どもの保健実習」の授業にポイントを伝えていきたいと考える。

引用参考文献

- 1) 東日本大震災・被災地レポート 月刊「保育情報」 No. 414 MAY. 2011 p17
- 2) 東日本大震災・被災地レポート 月刊「保育情報」 No. 414 MAY. 2011 p18
- 3) ルポ・被災地の保育所をあるく 保育の友Vol. 59 No. 11 2011 p5
- 4) ルポ・被災地の保育所をあるく 保育の友Vol. 59 No. 10 2011p1
- 5) ルポ・被災地の保育所をあるく 保育の友Vol. 59 No. 13 2011 p3
- 6) 東日本大震災と保育所 保育の友 Vol. 59 No. 8 2011 p5
- 7) 東日本大震災から何を学ぶか 保育の友Vol. 59 No. 14 2011 p10
- 8) 東日本大震災から何を学ぶか 保育の友Vol. 59 No. 14 2011 p17～18
- 9) 関川芳孝, 基礎から学ぶ保育リスクマネジメント 講座21, 保育の友 Vol. 60 No. 2 2012 p26～27
- 10) 関川芳孝, 基礎から学ぶ保育リスクマネジメント 講座22, 保育の友 Vol. 60 No. 3 2012 p26～27
- 11) 関川芳孝, 基礎から学ぶ保育リスクマネジメント 講座23, 保育の友 Vol. 60 No. 4 2012 p26～27